

新潟産業大学報

青海波



第2号

発行日 平成2年3月25日
 行集 新潟産業大学
 編集 新潟産業大学広報委員会
 新潟県柏崎市大字縣井川4730番地
 TEL. 0257-24-6655
 FAX 0257-22-1300

思而不学

（論語・為政）

学長 金田一郎

最近、わが国では色々な場面で「文化」が改めて口にされるようになった。終戦直後「文化国家建設」が叫ばれてから四十年以上経って改めてである。漸く経済的な裏付けを得て、それだけの余裕が出てきた、ということであろうか。後れ馳せでも、それ自体は一応結構なことである。

但、少々気になるのは、「文化」が安易に解され、通俗的な文化現象が拡がり始めたことである。多くの人が関心をもつ言語の問題に例を採ってみよう。

言語は誰もが日常的に使うものであるだけに、その問題は、誰にとっても取っ付き易く、茶飲み話



学園創設者、下條恭兵先生レリーフ

の延長で扱う傾向がある。一頃のタミル語と日本語の関係を強調する諸説、最近の、韓国語と日本語の関係を強調する諸説など、紛々として、まさに芬々たる百花繚乱の様相を呈しているが、残念ながら、その多くは、言語学の初歩的な方法論すら踏み外した——というより初めからそれに無知な、語呂合せの方法によるものが多い。因みに、最近、ある著名人（言語学者ではない）が、ある雑誌で「ハンガリー」の名がフン族の名に由来すると書いていたが、これは語源的にいつて明らかに誤りである。我々は、言語の問題に関しては、「懐疑的な余りに懐疑的な」デカルト的な態度で臨む必要がある。同時に、知識の、更に本質的には知IIエビステマーの重要性が改めて認識されねばならない。

「知」の欠如がより大きな実害をもたらす領域として、例えば私がメージャーとしている農業経済学や農業評論がある。

最近、農業に関する十分な知識を欠いた評論が多い。米を中心とする農産物需給の問題も、いわゆる国際分業論で単純に割り切りコスト的に引き合わぬものは輸入することがわが国のためでもあり、国際経済のためでもある、と簡単に飛躍する。ところで、その国際分業論の根拠になっているものは、多くの場合リカードウの「比較生産費説」という十九世紀の理論である。ここにも、知識の貧困が指摘される。

社会科学の領域では、もともと価値判断が事実判断の中に混入し易い。だからこそ、かつて「価値判断論争」が熾烈に闘わされたのである。知識が貧弱だと、事実判断をすべき場合にも価値判断に依存し、両者についてマクス・ウェーバーの謂う「不潔な混淆」を冒すこととなる。現在の農産物需給に関する議論も、一つ覚えの国際分業論だけだと、いよいよもってこの由々しい方向に行きかねない。

新潟産業大学は、今、開学三年目を迎えようとしている。平成二年度から、いよいよ本格的な専門教育が始まる。専門教育は、一般教育の広い知識の裾野の上に成り立っている。一般教育から専門教育に互る知識体系の意義と重要性を改めて強調しておきたい。

学報の創刊号で、私は「学而不思則罔」を引用して「自分の頭で考えること——創造」の重要性を強調したが、これと併せて、今回は「知識」の重要性を強調したい。知識を欠いた創造——それがもしあるとすれば、我流、独善がりに過ぎないであろう。「知ること」と「思うこと」を併せて行うことによって、我々は、古いイデオロギーの呪縛から解放されて、思考の自由を取り戻し、二十一世紀を考える新鮮な頭脳をもつことができるであろう。

下條恭兵先生による学園創設以来の学是である「主体性」の今日的な意義を、私はそのような意味の自由として理解したいと思っている。

新潟産業大学は、昨年五月、ハルビン師範大学との間に学術交流に関する協定を結んだ。その旨を以て、今回も中国の古典から一句を引用した。



一日5時間は読書に

学部長 教授 中村 忠一

本学も開学3年目に入り、専門科目の開講が本格的になります。大学に於ける専門科目は原則として4単位となつていますが、この

4単位の科目では2時間の講義に対し学生諸君は4時間の自学自習を行うという建前になっています。

10科目(40単位)の講義を受講すれば、週に40時間は自学自習を行わなくてはならないということです。つまり、日曜日に10時間勉強しても、他の曜日は毎日5時間勉強することが必要なわけです。

勿論、これはあくまで建前であつて、実際に学生諸君が読書に費やしているのは、平均すれば一日に2時間程度というのが、今日の大学生の実態でしょう。しかし、1日に2時間しか読書に費やさないといいのでは、大学生ではなくて遊学生といった方が適当な表現だと学生諸君も考えませんか。少なくとも一日平均5時間は読書にさくべきでしょう。

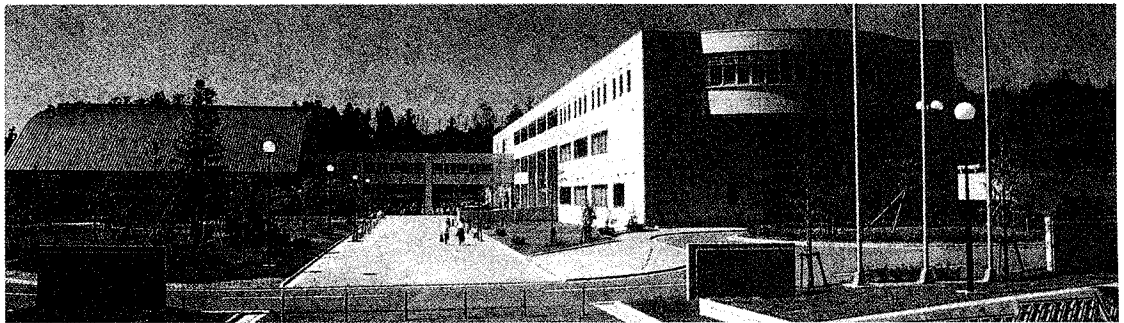
週35時間の読書は、なにも受講する科目について総合的に行う必要はありません。経済学部の学生としては、少なくともその半分は、経済学の理論と歴史に関するものにふるむけてはと思います。残り

の半分を自分の専攻しようとする分野と一般教養に関するものに振りむけるというのが適当な読書時間の配分だろうと私は思います。

読書の方法は精読と乱読とがありますが、いずれの方法をとっても結構です。最初の読書では正確に内容を把握できなくても、何回か読み返していく過程で次第にその内容を精度高く把握できるようになるものです。そして、そこで把握した内容を丹念にノートしておいた方が、私の経験からすればよいようです。ノートに丹念に記録していくというのを習慣づけることは、産業社会にでても大切な習性の一つとなるでしょう。

大変厳しいことを要求しているように考えられるかも知れませんが、一日5時間の読書は旧制時代の高校生や大学生にはごくあたりまえのことで、むしろ読書の時間が少ない方でした。夕方7時まで部活動を行ったあとも、少なくとも4時間ぐらひは半分は目を閉じても机の前に座ったものでした。

読書に専念できるのは学生の特権です。一日5時間の読書を学生諸君にすすめたい。それが学部長としての私の願望の一つです。



新任教員ご挨拶

助教授 酒井 三四郎

私とコンピュータの付き合いは十五年になります。そのコンピュータが発明されてからもう四十五年が経過し、その持つ汎用性が、種々の学問研究を含む社会のあらゆる側面に、多大な影響を与えてきたことは周知のとおりです。

今、高度情報社会で求められる能力として自分の求める情報を取り出し、自分の訴えたいことを表現し伝えることのできるインフォメーションリテラシが注目されています。

膨大な量の情報が電子メディアに載せられ、その情報から各種のデータベースが作成され、世界の知識のほとんどがオンラインで供給される状態にまで達しようとしています。こうした膨大な情報の流れをいかにうまく管理するか、即ち、情報をいかに選択し、蓄積し、流すかは情報の送り手/受け手を問わず大きな社会的関心になってくると予想されます。

経済学部の専門としての情報処理科目の目的は意志決定や問題解決を支援する道具としてコンピュータを駆使できる能力、情報を道具として利用できる能力を培うことだと思えます。私の担当する講義では、一、二年で基本的な

プログラミングを学んできた学生達にさらに多様なコンピュータの応用分野を理解してもらう目的で、表計算、グラフィックス、データベース、人工知能の各分野から選んだテーマを扱っていきます。単に計算機を操作できるというだけでなく、計算機で処理すべき事柄の取捨選択、処理された結果の評価判断力も同時に身に付けて欲しいと思っています。

大学においても学生が一人一台のパソコンを持ち、パソコン通信で自宅から大学のデータベースに接続し、図書館の本の所在検索、休講などの確認、レポート提出などの試みがなされようとしています。また、レポート作成に必要な情報を各種のデータベースから検索し、ワードプロセッサや表計算ソフトを使用してレポートを作成し、電子メールで情報交換ができるような環境を作っていくればよいと思っています。

最後になりましたが、微力ながら本学の発展のために努力するつもりでおりますので、皆様方のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。(電子計算機実習Ⅱ、プログラミングⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ担当)

『薔薇の名前』をめぐる

図書館長 教授 川村克己

「一三二七年十一月も末のある朝のことだった。夜のうちに雪は少し降ったが、大地をうっすらと覆う純白のヴェールは三センチにも満たなかった。まだ暗いうちに、讃歌のすぐあと、私たちは谷間の村でミサを聴いた。それから日の出を期して、山間をめざしながら旅立った。」

これは、私がいま愛読しつつある小説の始まりの部分である。作者はイタリアの世界的に有名な記号論学者ウンベルト・エーコ（一九三二）で、最近河島英昭氏によって翻訳され、東京創元社から出版された『薔薇の名前』という本である。中世十四世紀北イタリアの僧院を舞台に起る連続殺人事件を軸に、異端と正統、カトリック教内の各会派の争い、ローマ教皇庁とドイツ皇帝との確執が、複雑にからまり合う状況のなかで展開する壮大な物語でありながら、推理小説としての構想が十二分に発揮されている。洵に一読巻を描く能わざる興味をかきたてる作品となっている。昨年、東京でこ

の映画化されたものを見て、是非読みたいと思っていた。（主役のジョン・コネリーの修道僧は、はまり役で、彼の芸風の幅の広がったのに感心したものだ。）

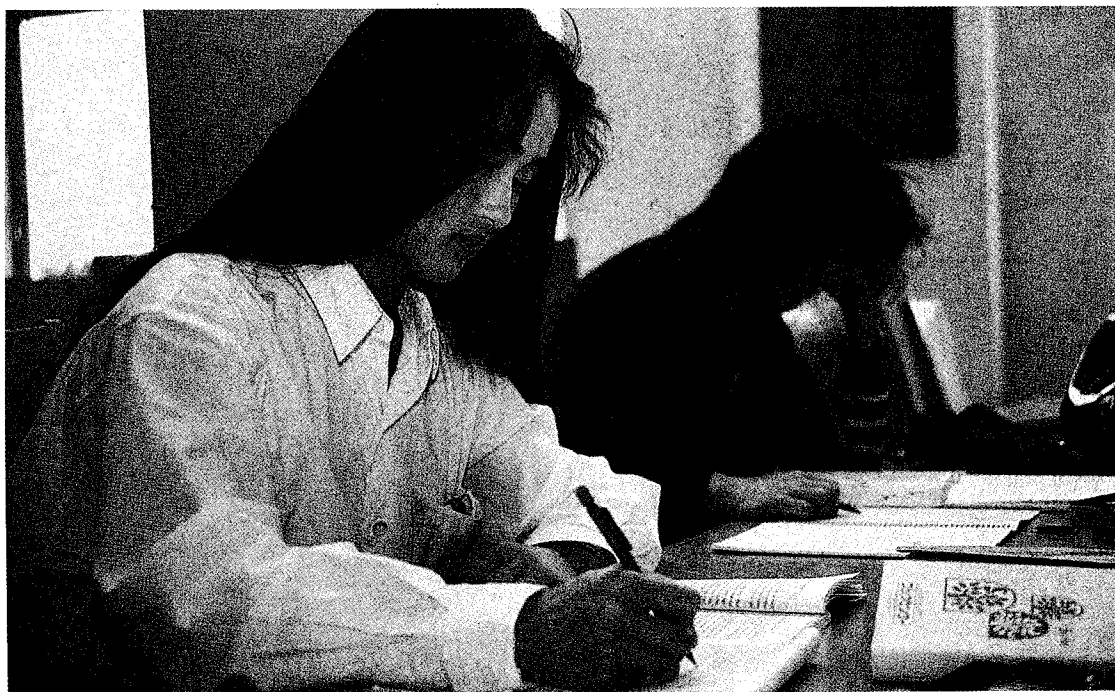
ところで先に引用した文中にある私たちとはフランチェスコ会修道士パスカヴェールのウィリアムと、その若き弟子のメルクのアドソのベネディクト会見習修道士（年若いこの物語の書き手となる）の二人である。ある使命を帯びて旅をする二人は、目的地のベネディクト会派の僧院を訪れるところなのである。山の上に見えてきた僧院には、八角形の異様な建物が目を惹く。それはこの僧院の誇る文書館（図書館）で、数知れぬ貴重な写本や文献、華麗な細密画に飾られた美本を備えている。アドソが物語る事件には、この異形で迷路に満ちた文書館が重要な役割を果たすことになる。

二人を迎えに出たアップポーネ僧院長は誇らしげにこうラテン語を引用して語る——「書物ナキ僧院ハ、サナガラ富ナキ都市、軍勢ナ

キ城、用具ナキ厨房、料理ナキ食卓、草木ナキ庭園、花ナキ野辺、枝葉ナキ樹木デアル」と。

前置きが長過ぎた感があるが、これからの私のテーマに入る。私はこちらを読んで、ふところ思ったこの「僧院」を「大学」と読みかえうのではないかと。〈書物ナキ大学ハ、サナガラ……〉さらに続く僧院長の言葉も我流に言葉を置き換えてみたくなった。「わが修道会（↓図書館）は知られるかぎりの世界をあまねく照らす光であり、知識の蔵であり、……新しい書物を生みだすための炉であり、古い書を育むための酵母であります」私たちの大学も、やがてはこのように誇りある図書館を持つことを心から願うものである。

先日、図書館の書庫で、もしかと思って探していたら、短大時代から所蔵されていた古い本があるのを教えられた。古びた和綴の本が相当数あるのにびっくりした。まだかいま見た程度だが、江戸末期から明治はじめにかけての木版摺や手写本が眠っていた。いずれ整理をしてみたいと思うが、「新しい書物を生みだすための炉となる」「古い本を育むための酵母となる」こともあろうかと、ひそかに心躍るのを禁じ得なかった。



コンピュータ室から Part II 公開講座を終えて

コンピュータ委員会 教授 村山 実

情報化社会のまっただ中であつて、最も影響を受けた分野は経済部門であろう。新潟産業大学が、情報化社会に対応できる経済人の育成と、開かれた大学を目指して設立されてから、2年を経過しようとしている。大学設立の主旨を遂行すべく、この度、情報処理国家試験準備講座と名うって柏崎情報開発学院と共催し、公開講座を開催した。

平成元年5月から平成2年2月まで、週2回、午後6時から7時半までの90分間の講義である。社会人3名、学生43名、合計46名の聴講生でスタートした。実際には、百名近い応募者があつたが、実習設備による制限から四十名前後に限定せざるを得なかつた。

講座は前期が「ソフトウェアの基礎知識」、「ハードウェアの基礎知識」、後期が「プログラミングの基礎」、「関連知識」を各々十五回の講義であつた。

当初、交通の不便や、時間帯の問題、また長期間であることから出席率が懸念された。しかし、前期で90%以上、後期で60%以上の出席を確保できた。

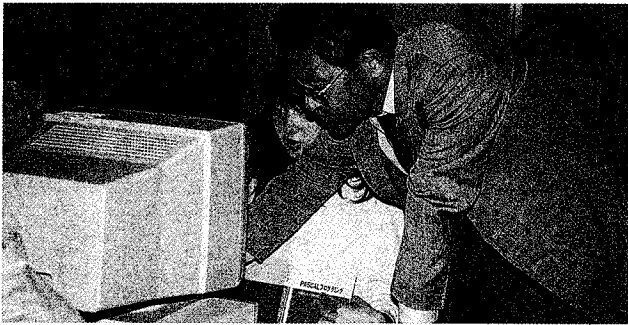
聴講の条件は決して恵まれたものではなかつたが、聴講生諸氏の熱心な勉学態度には、むしろ講師の方が教えられる思いであつた。

講義が終了した後も、真剣な質疑応答が行われ、普段の大学の講義ではなかなか実現できない雰囲気を作り上げてくれた。特に学生にとって社会人と接触する機会に恵まれたことは、副次的効果もあり、大変有意義なものであつた。

この講座は終了することによつて、特別な資格が得られるものではないため、かえつて強い意志と自発性の旺盛な人達に支えられる結果になつたと思う。通常の大学の講義が本来あるべき姿を、この講座に見た思いがする。

最後に、終盤近くで、日程のや

りくりで、聴講生に迷惑をおかけした事をお詫びするとともに、ご協力頂いた方々に、厚くお礼を申し上げます次第である。



公開講座全課程修了証

第 号

修 了 証

殿

あなたは下記のコースの全課程を修了されたことを証します

記

第 期

情報処理技術者試験準備講座

平成 年 月 日より
平成 年 月 日まで

平成 年 月 日

新潟産業大学 金田一郎

体育授業を通じて

運動のすすめ

講師 広川俊 男

私達は、平均寿命が約80才と世界でも1、2を競う長寿国日本で生活している。専門家の研究によると、過去の日本人の平均寿命は、江戸時代（一七〇〇年頃）約20才、明治中期約35才、昭和初期約45才と伸び、昭和25年（一九五〇年）頃には60才に到達したとされている。そして昭和30年以降は、各5年毎に約2才ずつ寿命が伸びながら今日に至っている。

「江戸時代は20才」と聞くと「その頃は、みんな20才ぐらいで死んでいたのかな」との錯覚に陥るかもしれないが、そうではない。勿論80、90才の老人もいたはずだが0才で死ぬ者も多く「オギャー」と生まれた子の寿命の平均値が20才だったということである。

さて、今日のように寿命が伸びた理由であるが、残念ながら「日本人が丈夫で健康になったから……」ではない。医学・薬学等の進歩で、「死にくくなった」のが実情で、特に伝染病による死亡が減少したこと、乳幼児の死亡率が低下した

ことがあげられる。

健康になったどころか様々な調査では「体力の低下」や「病人が増加中」といった傾向しか出てこないのが現実のようだ。例えば人口一千人当たりの罹病率（何らかの疾病をもつ人の割合）は昭和30年38人、40年64人、50年110人、60年145人と30年間で4倍にもなっている。特に75才以上の人の罹病率は、昭和30年の71人に対し60年は568人と8倍になっている。

このように「寿命は伸びたが病人ばかりが目立つ世の中」に移り変わり、「健康」が社会の大きな関心事になってしまった。

しかし、学生や若い人達にとってそのことはまだ切実な問題ではないようだ。授業でも時々取り上げるが深刻な問題としては決して受け止められてはいないように見える。若く元気で無理の利くこの世代では、むしろ当然のことで、今から健康云々を考えたりにすることの方がやや異常なのかもしれない。

実際、身体には「若さ」が全てをカバーしてくれる時期もあるようだ。

老人にとって骨折はしばしば命取りになる。ベッドに横たわる時間に比例して、足と心臓が弱まるからだ。だが、若者にはそのような心配はない。しばらく入院しても、退院すればすぐ元に戻復する。

又、喫煙の害をめぐる各調査でも若年層においては、喫煙群と非喫煙群との間に大きな差が見出し難いと言う。実際にそれが顕著になるのは40代後半からで、アルコールの害についても同様のことが言えるようだ。

こう書くくと「若い人は無理をしても、健康に無関心でも良い」と誤解されそうだが、私の真意は、勿論違ふ。加齢に伴う身体の変化についての正しい知識を身につけることと将来の健康的な生活のために良い習慣づくりをすることくらは学生時代にやっておいて欲しいものである。

実際、余りに身近過ぎて、ついつい無視してしまうのが自分自身の身体である。病気なら注意もするが元気な時は存在感すら失せてしまう。そして、知っているようで意外に知らないのが身体に関することだ。

働き続ける心臓が日に10万回もビートすること。送り出す血液量が8トン、つまりドラム缶40本分であること。その強靱な心臓も、適度に鍛えと強化されるが放っておくと弱くなること、などは通常それ程認識しない。又、成人の8割が腰痛経験者でその腰痛の5割が運動不足による腹筋、背筋の衰えに起因していることなども知られているようでそうでもない。

科学の進歩は一方で、動きの少ない生活スタイルを生み出した。工場でも、農家でも機械化が進み、移動、運搬も全て車に頼る時代に、心拍数を安静時の2倍に保つことは意識的に運動を行うこと以外には実現できなくなっている。自ら運動の時間を見つけ、用具と場所を確保しなければならぬことになる。

現在、各界で活躍する人物の多くは、運動習慣をもっていると言われている。どんなに優れた能力を有しているも不健康では力を発揮できないということか。

幸い、就職を4年先に延ばし、専門知識を得るための時間が確保された学生諸君には、その身につける専門知識の片隅に、身体についての知識も加えておいていただきたい。更に、余裕ある時間を上手に配分し、運動を生活の一部と

して習慣化して欲しいものだ。本来、身体を動かすことは、楽しく気持ちの良いものである。それまで運動に縁の無かった人が何かのきっかけで「病み付き」になったという話も良く聞く。こういう「病み付き」なら大歓迎。良い空氣のもと、思い切り身体を動かして欲しい。



体育実技・スキー授業風景

青春の可能性

教授 箕輪真澄

「五月病」という大学キャンパス症候群は慢性化して今日も続いているらしい。最近の国語辞典もこれを登録語に取り上げている。

四月に「意気揚揚」と入学したはずの新入生が、新環境に適應できず、五月ごろにはすっかり「意気消沈」して無気力・無関心・無責任の三無症に陥ってしまう。特に不本意入学者にこの傾向が強い。

要するに人間は夢や希望が高く大きければ大きい程、手にする現実とは低く小さいものだ。哲学者はこれを「浪漫的反語(ロマンチックアイロニー)」などと呼んでいる。

従って「五月病」の予防法は実に簡単、大学への過大な期待を棄てることだ。大学は遊園地ではない。学問がおもしろおかしいわけではない。むしろ、知的好奇心の欠けた者には教室は「地獄」になる。

「知とは人生を燃やし尽す情熱の火のことだ」ということを、高校卒業記念に私は恩師から頂いた。大学時代、私は島崎藤村の人と文学に心酔した。「桜の実の熟する時」「春」などの長編に描かれ

た作者の若き日の自画像に自分の青春を重ねて愛読した。藤村の青春の指標は四つある。「友」「恋」「本」「旅」がそれである。

藤村は青年期に北村透谷という親友を得た。「論語」に「益者三友」の教えがある。友として益ある者に、「直」行いの正直な者、「諒」言葉に誠実な者、「多聞」見聞豊かな者の三種がある。透谷はこの三条件が揃っていた。良き友は金銀に勝る最大の資本である。青春と友情とはこよなき取り合わせだ。情熱の人、透谷は、内向的な同化性気質の藤村に大きな影響を与えた。

藤村は透谷の「厭世詩家と女性」という評論を読み、「恋愛こそ人生を開く鍵だ」と公言する友の情熱に深く共鳴した。引つ込み思案の藤村が佐藤輔子という東北出身の女子学生に恋をした。もどかしい恋で、二人共に苦しみ傷つき、結局は実らずじまいに終わったが、藤村の人生に一大転機をもたらした。文学者藤村は、この親友と恋人とのめぐりあいから生まれたと

いっても過言ではない。その昔、

王朝歌人は

恋せずば人は心もなからまし

物のあはれもこれよりぞ知る

と詠った。「孤独は人のふるさと、

恋愛は人生の花」という真理は、

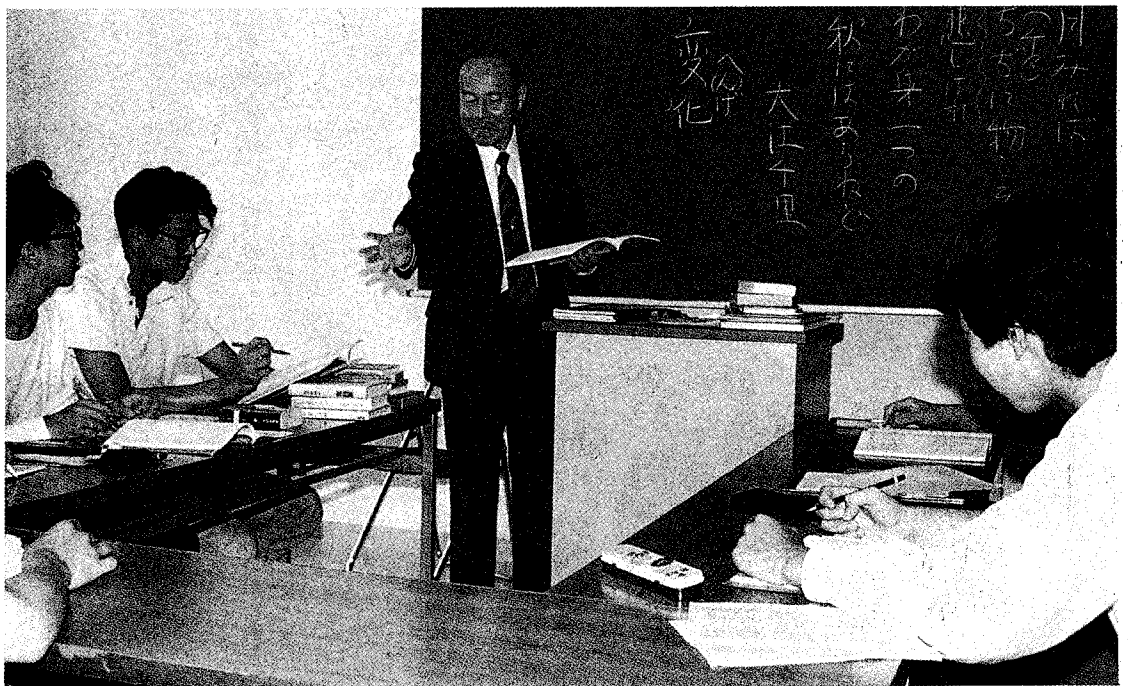
いつの世も不変である。

藤村が数々読んだ「本」の中で、最大の愛読書は芭蕉の「奥の細道」であった。悩み多き青春期を過ごした藤村は、生活と文学を一元化した芭蕉の生き方に惹かれ、芭蕉の中に自己と等質なものを発見して、芭蕉を「人生の教師」として尊敬した。特に人生を旅とする考え方は、生涯を通じて藤村の行動原理となった。

「旅」は藤村の青春の危機を救った。恋に行き詰まった藤村は、芭蕉の本を持って旅に出た。旅に出て、自らを見つめ直し、自分の心を励ました。動揺し苦悶する藤村に新生の契機を与えたものは、常に芭蕉であり、「旅」であった。

アンデルセンは「私の大学は旅だ」といい、西鶴は「旅こそわが師」と言った。青春と旅もまた切り離せない関連科目だ。

総じて「青春」とは、己が可能性を探索する実験である。失敗を恐れず、新しい人生を求めて果敢に未知の世界を切り拓いていく賭けである。大学生活を生涯最高の黄金時代にするためには、先ず「五月病」をぶっとばせ。



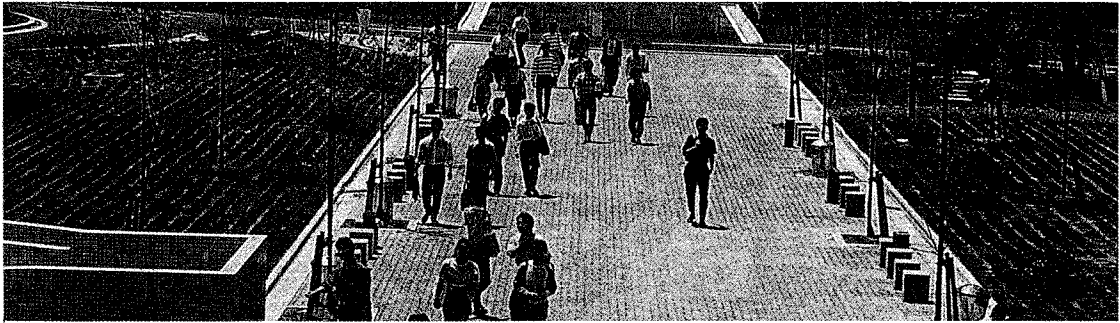
今の私、そしてこれからの私 留学生として本学で学ぶ日々

聴講生 宣 巍 松

独特な建築風格の、きれいなピンク色の新潟産業大学に初めて入ったとたんに、若者の青春の夢と明るい将来がその中に含まれているのだろうかと強く感じさせられたのであった。私は金田学長と先生方の厚いご配慮とご援助で、はるばる中国・上海からくることができ、聴講生として、新たな留学生生活を始めた。わずか半年だが、この目でものを見たり、この耳で、ものを聞いたりして、新しいものばかり習って、毎日充実している。

確かに、中国の大学とちよっと違って、こちらは創造的研究、教育を行っていることが非常に印象深かった。先生方が一方通行に教えるのではなく、啓発的に、学生の個性、能力を發揮できるようにさせていると思う。「好きこそもの上手なれ」と経済学概論の菅野先生がご講義でおっしゃった言葉が今でも耳に響いているのである。頭の良き悪きと関係なく、好きでこそ積極的に学問を習い、研究していくのだろう。その中に社

会に役立つ人材がどんどん育てられていくのではなからうか。それこそ、現代の大学、学生の使命であらう。私は先生方の教え方、やり方を通じ授業に没頭し、箕輪先生の《日本文学》《言語表現》を熱心に聞き、大変良い勉強になるのであり、先生はまたわざわざ特別授業をしてくださって、本当に助けられ、深く感謝している。「雪国」など優秀な文学作品を誕生させた、人情味に溢れた日本、その国土で、私は肌で日本人の優しさを感じた。もっともっと勉強して、祖国の現代の建設に自分の力をさげようと思っている。



残された時間と これからの私達にできること

新潟産業大学3年 空手道部長 星 野 康 夫

やらなければならぬ事がたくさんあると思いつつ、もう二年が過ぎようとしている。空手道部を創設し、ようやく軌道にのったと思っていたのも東の間、時間というものは速いものだ。

しかし、この二年間で私を含め、空手道部員は少なくともチームワークについて学んだと思う。ゼロからスタートし、皆が協力し合い、それぞれの目標に向かって全力でつっばしり、そして、辛い事も楽しい事も皆で味わってきた。

くじけそうな者がいたときも助け合い、がっちりスクラムを組んできた。今年から入部してくる後輩のために、しっかりととした土台を作っておこうという気持ちでそうさせているのだろうか。

考えてみれば、我が新潟産業大学の学生は、一生懸命頑張っている人達も多数いるが、まだまだ無関心の学生もいる。本当にこのままでよいのであるか。もっと大事な点に目を配らなければならぬのではないだろうか。ただ単に学生生活を送っていても何も得ら

れないのだ。もっと自分に厳しく、そして自分のためにも、後輩達のためにも何かを残そうという気持ちが大事なのではないだろうか。私達だけが作れる、そして私達だけが持っているカラーを作り出していかなければならないのではないだろうか。

学生一人一人を見てみると色々なカラーを持っている。そのカラーを皆で出し合えば、私たちがの独特のカラーを作ることが出来る。それがどのような色になるかはわからないが、皆で力を合わせてできるカラーなのだから、きつと満足のいくものができると思う。そのとき初めて、何かを残すことができるのではないだろうか。こうしている間にも時間は刻々と進んでいる。残された時間、皆のカラーを出し合おう。そして、新潟産業大学での学生生活を、良い思い出として残すことができるようにがんばろうではないか。

「さあ、友よ、立ち上がれ。俺たちのカラーを作り出そう。」

学業散歩

鹿角ふるさと大使

教授 菅野英機

私の専門は、経済学の理論のあり方を考案する理論経済学という分野です。経済学説の流れのなかで、各理論の特徴を明らかにするとともに、歴史の流れのなかで理論を検証すること、そして理論そのものの論理的考察と併せて、現実の経済への適合性などを研究しています。かかる研究の目的は、より優れた理論の構築を助け、誤った理論を正すことにあります。その理論が優れているか否かは、何よりもその理論によって、現実の現在の経済が的確に分析出来、その分析にそって適切な政策提言が出来るか否か、またその結果がよい成果を上げ得るか否かにかかっている、と言えるでしょう。

そんな私の仕事の一端に、縁あって、秋田県の鹿角市の新しい発展計画を作ることに一部をお手伝いする機会がありました。資料を作ったり、市長さんと御一緒にシンポジウムに参加したりしました。その時の資料の一部を手直したものを現在大学の紀要に連載しているところです。

そんな縁で、つい先日鹿角市から「ふるさと大使」に任ぜられ、左記のような名刺を、市勢要覧や統計資料、そして鹿角市の特産であるユゼ石鹼などと一緒に頂きました。

名刺の裏には、次のように記してあります。



「青垣山をめぐらせる天さかる鹿角の国をしのぶれば涙し流る」と、石川啄木が歌っているように、山に囲まれ、温泉が豊富で、人情豊かな鹿角、この鹿角をこよなく愛しご意見をいただく方に鹿角ふるさと大使をお願いしております。秋田県鹿角市長——

数百年に渡って鹿角を支えてきた鉱山が近年相次いで閉鎖され、市の人口も急減する事態に至ってしまいました。

そこで観光を中心に、工場の誘致、商業の活性化、米作に偏らない風土に根差し、観光や工業とも結びついたバラエティに富みパランスの取れた農業、高等教育機関の整備などによって市の新しい発展を図ることになったわけですが、経済学を通して、いくらかでもこの素晴らしい鹿角の為になれるのであればと、経済学の研究をしてきたことに、改めてささやかな喜びを感じている今日この頃です。生ある限り、この道を静かに歩み続けるつもりです。(筆者は経済学概論、経済学原論Ⅰ・Ⅱ、現代経済学ゼミの担当教授)

部活だより

《平成元年度卓球部戦績》

新潟産業大学が設立し二年を経過しクラブ活動もようやく軌道に乗ろうとしている。平成元年度においてめざましい活躍をした卓球部の戦績を次に報告します。これを一つのきっかけとして、来年度は活躍が期待できる部がいくつもあり、来年度が楽しみです。

平成元年度 新潟産業大学 卓球部戦績

(3位以上の入賞について)

- 春季北信越学生卓球選手権大会 (5月24日～28日 於金沢市)
 - 団体戦.....3位
 - 全日本・東日本大学卓球選手権大会北信越予選
 - 団体戦.....3位
 - 個人戦.....3位
 - シングルス 渡辺卓也 3位
 - ダブルス (増田善晴) 3位
- この結果、渡辺、増田は全日本、東日本選手権に出場(結果 1回戦、2回戦で敗退)
- 秋季北信越学生卓球選手権大会 (11月16日～19日 於富山市)
 - 個人戦
 - シングルス 増田善晴 2位
 - ダブルス (渡辺卓也) 3位



- 北信越学生新人卓球選手権大会 (12月7日～9日 於金沢市)
 - 団体戦.....2位
 - 個人戦.....2位
 - シングルス 渡辺卓也 優勝
 - ダブルス 増田善晴 2位
 - (渡辺卓也) 優勝
 - (増田善晴) 優勝

編集後記

広報委員 中村真一
昭和から平成へと新しい時代を迎えたこの一年でしたが、開学二年目の本学にあっても多くの新しい動きがありました。

その一つとして、大学の国際化にむけ隣国中国ハルビン師範大学との間に教育研究の国際交流に関する協定を結び、昨年八月にはハルビン師範大学徐国林学長を本学にお迎えしました。今後、積極的に留学生交換や学術交流を通じて国際交流を進める方針です。また地域社会に対しては、開かれた大学として本学初の公開講座を開講し社会人の受入れを行うなど大きな成果を上げることができました。学内にあっては、学生のクラブ・サークル活動も活発な動きがあり、キャンパスに若人の熱気があふれる一年でした。

今後ますます多様な動きがある本学ですが、そのつど、学報で皆様にお知らせしたいと思いますので、どうぞ、ご期待下さい。